

「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告

(2) 受講生アンケート報告

Chugokugakuen English Activities for Elementary School (Ministry of Education, Culture, Sports and Technology elementary school English area support project) (2) Report on the Participants' Feedback

(2006年3月31日受理)

松畑 熙一 Kiichi Matsuhata	中野 宏 Hiroshi Nakano	名合 智子 Tomoko Nagoh	橋内 幸子 Sachiko Hashiuchi
垣見 益子 Masuko Kakehi	佐生 武彦 Takehiko Saiki	佐藤 大介 Daisuke Sato	

Key words: 「中国学園小学校英語活動支援講座」, 「文部科学省小学校英語活動地域サポート事業」, 小学校英語活動, 支援体制の確立, 実践と評価

抄 録

本学で開講した「中国学園小学校英語活動支援講座」に関して受講生を対象にアンケート調査をした結果、講座の回数、長さ、時間帯、時期、会場・設備、配付資料のいずれの項目においても、満足いくものであったという回答が全体の8割を超えていた。ほぼ2週間おきの土曜日開講については、前述の項目に比べて満足度がやや下がったものの、全体の7割近くが支持をしている。特に役に立つ内容としては、ゲームやチャンツのような実践的指導スキルが最も多く挙げられており、続いて、クラスルームイングリッシュなどの英語力強化内容、模擬授業などの実践、年間計画などの順であった。

以上の結果から、本講座は、受講生のニーズに十分に応えたものであったといえる。

I. はじめに

「文部科学省小学校英語活動地域サポート事業」として本学で開講した「中国学園小学校英語活動支援講座」(本稿では以後「支援講座」と呼ぶ)の詳細については、『(1)実施報告』に記されているとおりである。

支援講座の実施に当たり、英語コミュニケーション学科では、時期、回数、会場、内容など、一般的に十分な検討を重ねてきた。それらを含めて、受講生が本支援講座をどのように評価しているかを知るために、受講生を対象にしたアンケート調査を実施した。本稿はそのアンケート結果を分析し、まとめたものである。

II. アンケート調査全体の概要

1. 調査全体の目的

本研究の目的は、以下のようであった。

- ① 今回の支援講座に対する受講生の意見を知り、今後本学で同様の講座を開講する際の参考とする。
- ② 本学の英語コミュニケーション学科では、児童英語教育コースを設け、子どもに英語を教える人材の育成に取り組んでいる。現場で児童英語教育を行っている小学校の先生たちに、さまざまな角度から質問をし、得られた回答を今後の教員養成の参考とする。

紙数の関係から、本稿では、①のみに絞って報告することにする。

2. 調査全体の概要

前掲の目的のために、次のようなアンケート調査を実施した。

- 1) 調査期間：2006年2月18日～2006年2月末
- 2) 調査方法：無記名アンケート。最終講座で配布し記入。欠席者には郵便で依頼し返送。
- 3) 調査対象者：平成17年度本学支援講座の受講生77人
- 4) 有効回答数：60人（回収率77.9%）

アンケート用紙を作成するに当たっては、単に支援講座実施状況に関してのみでなく、多角的な方向からの調査を試みたため、設問数が多くなった。最終講座日に講座の合間を利用して回答してもらったため、回答時間不足の感はいない。回答者によっては無回答の項目が散見されたが、全般的な傾向を把握する上で、大変貴重な資料となった。

本支援講座に関するアンケート結果を分析、考察するに当たっては、次の観点からの比較も試みる。

- ① 回答者の支援講座への出席回数
- ② 回答者の教職歴

Ⅲ. 回答者の属性

1. 教職歴

教職歴について、1年～5年、6年～10年、11年～15年、16年～20年、それ以上、と5段階に分けて尋ねたところ、図1のような回答であった。

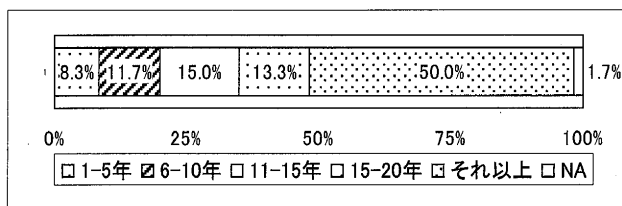


図1 教職歴 n=60

教職歴が20年を越える受講生が30人で、回答者の半数を占めている。今回の支援講座に経験豊かな先生たちが多く出席してくれたことが分かる。その他の区分の割合は、1年～5年が5人（8.3%）、6年～10年が7人（11.7%）、11年～15年が9人（15%）、16年～20年が8人（13.3%）であった。

教職歴の観点からアンケート結果を比較分析するに当

たっては、回答者を教職歴20年までのグループ（29人）と、それ以上のグループ（30人）とに分けることにする。

2. 出席回数

平成17年10月8日から翌年2月18日まで、講座は合計10回開講された。1回～3回、4回～6回、7回～8回、9回～10回の4段階に分けたところ、60名の回答者の参加状況は図2のようであった。

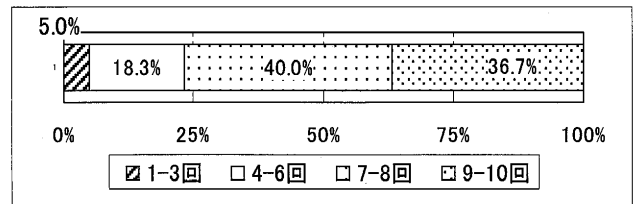


図2 講座出席回数（全体）（n=60）

回答者の37%が9回以上出席しており、7回以上が全体の75%を越えている。

アンケート結果を比較分析するに当たっては、1回～6回（14人）、7回～8回（24人）、9回～10回（22人）の3グループに分けることにする。

なお、出席回数を教職歴別に見ると、図3のようであった。20年を越える教職歴の受講生が若干出席回数が多かったが、あまり大きな違いは見られなかった。

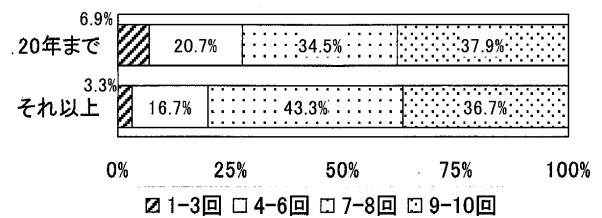


図3 講座出席回数（教職歴別） n=59

Ⅳ. 支援講座についてのアンケート結果

1. 講座回数について

10回という講座回数の多寡については、「ちょうど良かった」という意見が圧倒的に多く、全体では82%を占めた。「多すぎた」の意見は9人（15%）、「少なすぎた」は1人（1.7%）であった。

出席回数別に見ると、出席回数が減るに従って「多すぎた」の回答率が上がっているのが分かる。何らかの理

由で欠席せざるを得なかった回数が多いほど、実施の回数が「多すぎる」と感じたようである。逆にほぼ全回参加できた回答者は「ちょうど良かった」と感じており、「少なかった」と回答した人までいたのは興味深い。（図4）

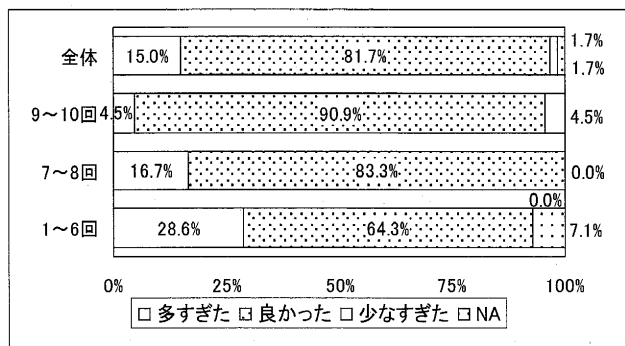


図4 講座回数について（出席回数別） n=60

開講回数に対する意見を教職歴別に見ると、図5のようであった。20年を越える教職経験者のグループに「多すぎた」という意見が多かった一方、「少なかった」との意見も出た。

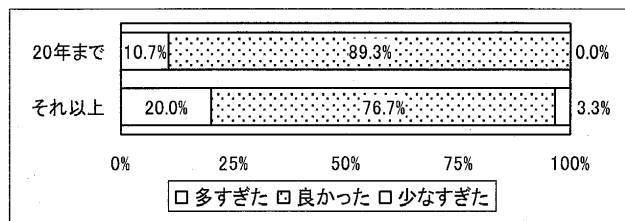


図5 講座回数について（職歴別） n=59

2. 講座の長さについて

各講座は、午後1時から4時まで3時間開催された。その長さについての意見は、図6のように、全体では「ちょうど良かった」という意見が83%を占めた。しかし、回数と同様に「長すぎた」の意見も17%あった。「短すぎた」という回答は無かった。

出席回数別に見ると、出席回数が多い人ほど「ちょうど良かった」という意見が多くなっている。

教職歴別には違いは見られなかった。（図7）

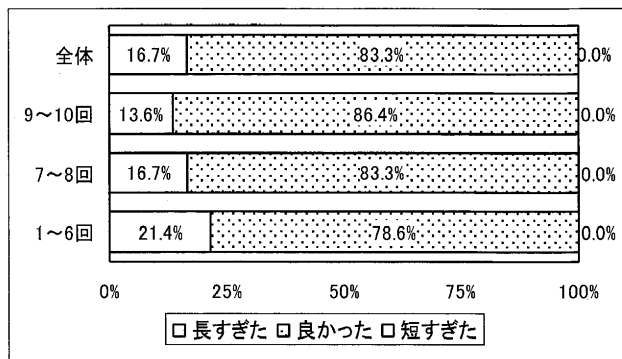


図6 講座の長さについて（出席回数別） n=60

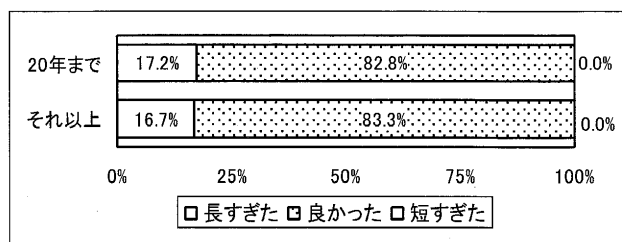


図7 講座の長さについて（教職歴別） n=59

3. 講座の時間帯について

午後1時から支援講座を始めたことについては、全体では「ちょうど良かった」が80%を占めた。（図8）「早すぎた」の8人（13%）の内2人は、次のように記述していた。

- ・遠いところから来ているので2:00~5:00が良かった（出席7回~8回）
- ・1:30頃からは良い。（出席4回~6回）

反対に「遅すぎた」という回答は3人（5%）であった。

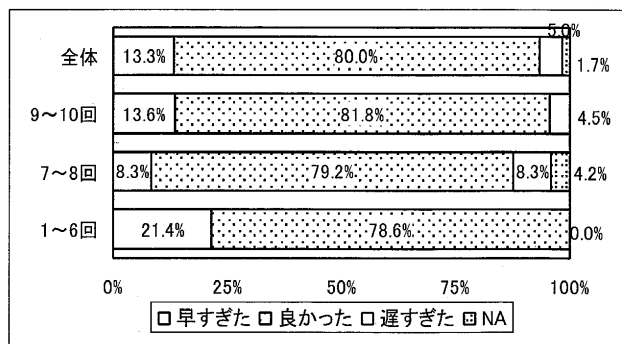


図8 講座の時間帯について（出席回数別） n=60

出席回数別に見ると、出席回数の少ない受講者に「遅すぎた」は無く、逆に「早すぎた」が3人（21.4%）と最も多かった。（図8）9回~10回出席者の内3人

(13.6%) が「早すぎた」と回答している。何とか都合をつけて毎回あるいは9回参加してくれたことが分かる。

教職歴別に見ると、20年以内のグループで「早すぎた」が5人(17.2%)「遅すぎた」が2人(6.9%)と、20年を越えるグループのそれぞれ3人(10%)、1人(3.3%)を上回った。(図9)

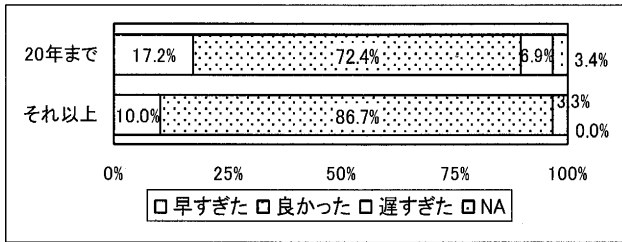


図9 講座の時間帯について (教職歴別) n=59

4. 講座の開講時期について

10月から2月という講座の開講時期については、全体では80%の参加者が「都合が良かった」と答えている。(図10)

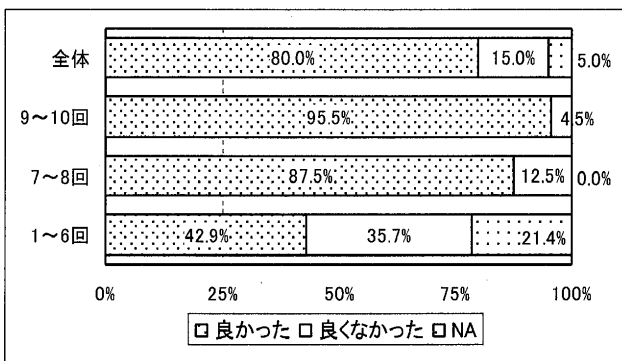


図10 講座の時期について (出席回数別) n=60

出席回数別に見ると、他の項目以上にグループ間の差が大きくなっている。1回~6回のグループに無回答が3人(21.4%)と多く、「良くなかった」の回答も5人(35.7%)と他のグループを大幅に上回っている。「良かった」の回答が半数を下回っていることから、支援講座の開講時期が、欠席が多くなった大きな原因の一つであったと考えられる。このことは、9回~10回出席者の95.5%が「良かった」と回答していることにも裏付けられている。

教職歴別に見た場合、講座の時間帯についてと同様に、20年を越える教職歴をもつグループに「都合が良かった」という回答が多くなっている。(図11)

た」という回答が多くなっている。(図11)

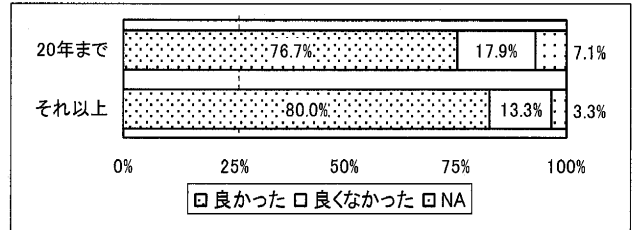


図11 講座の時期について (教職歴別) n=59

それぞれの回答には、次のような意見が添えられていた。

〈都合が良くなかった (9人)〉

- ・長期休業中(夏休み)が良い。(出席4~6回)
※同様の意見ほか3人
- ・5月~6月からのスタートがよい。(出席7~8回)
- ・12月だけは避けてほしい。通知表が厳しいので。
- ・県北なので、雪の少ない時期にしてほしい。教育課程編成にかからない早い時期に。(出席4~6回)
- ・年度当初に計画できると都合が合いやすい。(出席7~8回)

〈無回答 (3人)〉

- ・どの時期でも全部参加はできないと思った。2月は出張と重なることが多かった。(出席4~6回)
- ・夏などの長期休業中の方が参加しやすい。(出席9~10回) ※同様の意見ほか1人

〈都合が良かった (1人)〉

- ・どの時期でもいろいろあるので、同じことだと思う。(出席7~8回)

多忙を極める現職の先生たちに共通して都合の良い時期を設定することがいかに困難であるか、痛感させられる。そういう状況の中で、今回の支援講座の開講時期について80%の回答者が肯定的であったのは喜ばしいことである。しかし、今後同様の講座を設定するに当たっては、長期休暇中の実施を希望する意見やその他の意見も取り入れて検討する必要があることを認識させられた。

5. 開講方式(土曜日開講)について

今回は年末年始の4週間を除いて、ほぼ平均2週間に1回、土曜日だけにのみ講座を開催した。(諸般の事情で3週間空いたのが1回、2週連続になったのが2回あった)

支援講座を土曜日のみに開講したことについては、「都合が良かった」「連続開催が良かった（例えば夏に5日間）」「その他」の選択肢を用意した。

他の項目と比べて、「都合が良かった」の割合が全体で68.3%と最も低くなった。（図12）

出席回数別に見ると、グループ間の差も、開講時期よりもさらに広がっている。土曜日のみの開講が欠席のもう一つの原因であると察せられる。

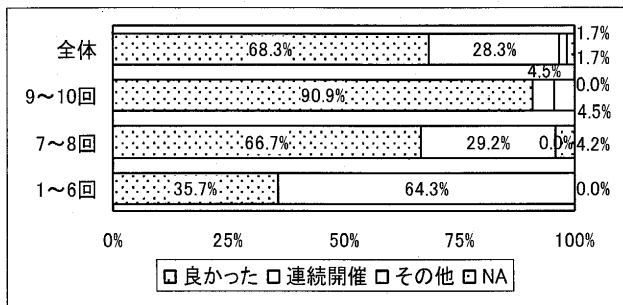


図12 土曜日開講について（出席回数別） n=60

教職歴別には、2グループ間で大きな差は認められなかった。（図13）

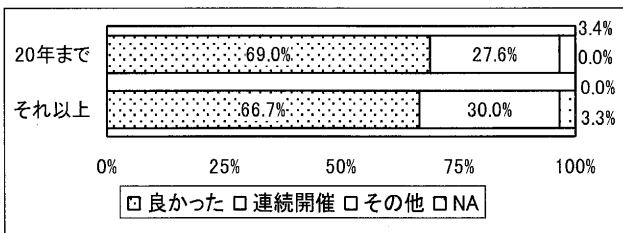


図13 土曜日開講について（教職歴別） n=59

この項目では、次のような記述がみられた。

〈都合が良かった（41人）〉

- ・土曜日に学校行事などがあったが、仕方のないことだと思う。（出席7~8回）
- ・連続的に集中すると、夏は出にくい場合もあるので、土曜日のみで良かった。（出席9~10回）

〈その他（1人）〉

- ・その年にもよるので、何ともいえない。（出席9~10回）

〈無回答（1人）〉

- ・どのやり方でも一長一短である。（出席7~8回）

支援講座開催の方式を考えるに当たっては、前述の開

講時期を併せて考慮に入れなくてはならない。

開講時期と開講方式のいずれにも「都合が良くなかった」と回答しているのは5人であり、異口同音に長期休暇（夏休みなど）を希望する記述をしている。このことから、「連続開催が良かった」の回答者は、必ずしも例示のような毎日連続の開講を望むとは限らないことが察せられる。比較的時期を集中させた狭い間隔での開催を望む声も含まれているものと考えられる。

週末開催、集中開催、両方の折半など、どのような開講方式にするのが良いか、上述の時期設定と同様に、大変難しい問題である。今回は回答者の過半数の賛意を得られたが、今後現場の先生方の参加がより容易な開催方法を検討していくことが課題である。

6. 会場や設備について

支援講座会場としては、以下の理由から本学の合唱教室を選んだ。

- ① ピアノ、AV機器などが設置されている。
- ② 南門から近い。
- ③ 定員の50名を十分収容できる広さがある。
- ④ 教材展示用の補助的な部屋を確保しやすい。
- ⑤ トイレが近くにある。

全体的に「良かった」との意見が8割を越えたが、「良くなかった」との回答も13%以上あった。（図14）

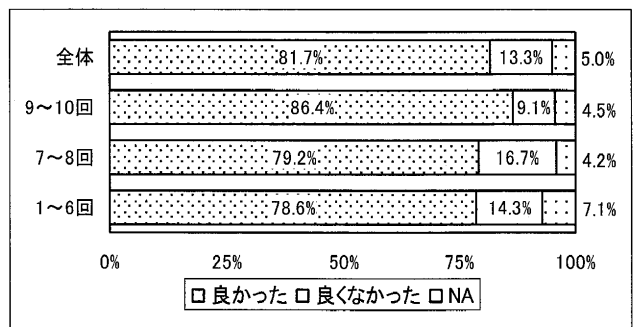


図14 会場や設備について（出席回数別） n=60

出席回数別に見ると、3グループ間に大きな差はなかったが、教職歴別では、20年を越えるグループに無回答が多く、ちょうどその分「良かった」の割合が下がっている。（図15）

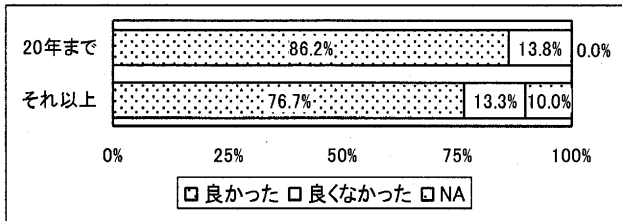


図15 会場や設備について (教職歴別) n=59

回答には次のような意見が添えられていた。「良かった」と回答したものの、全ての点で満足がいったわけではないようである。

〈良かった (49人)〉

- ・トイレが少なくて困った。(出席9~10回) ※同様の意見他1人
- ・毎回少し暑かった。(出席9~10回)

〈良くなかった (8人)〉

- ・(椅子と一体の折り畳み)机が不安定だった。机はあった方がよい。(出席7~8回)
- ・もう少し広い場所, グループや列になったり, ゲームをしたりする場所がほしい。(出席9~10回) ※同様の意見ほか2人
- ・もう少し広い方が見えやすい。(出席7~8回)

まずトイレの不足について。短時間の休憩時に利用が集中する状況を見て、急遽、他の建物のトイレも案内を出して対応した。しかし、一部が不慮の故障により使用できない日もあり、参加者には迷惑をかけてしまったようである。学内にある多くのトイレを利用してもらえるよう、今後案内をする上で万全を期す必要があると認識された。

次に広さについて。会場決定に当たっては、募集時点の定員50名を想定していたので、比較的十分な広さが確保できるものと期待していた。しかし、現実には予想を大幅に越える申込みがあり、定員を遙かに越える80人近くを受け入れざるを得なくなった。

講座の中では毎回のように机の配置を途中で学年別の輪に変えたり、教卓の前のスペースでゲームや模擬授業をしたり、と、様々な活動がなされたので、受講生が少し狭く感じたことは無理からぬことであると察せられる。

多くの条件を満たす教室を確保しつつ、定員を越える申込みにどう対応していくのか、これも今後の大きな課

題であるといえる。

7. 配付資料について

支援講座での配付資料について、「少ないと感じた」「ちょうど良かった」「多いと感じた」の選択肢を用意した。その結果図16, 図17のような結果となった。

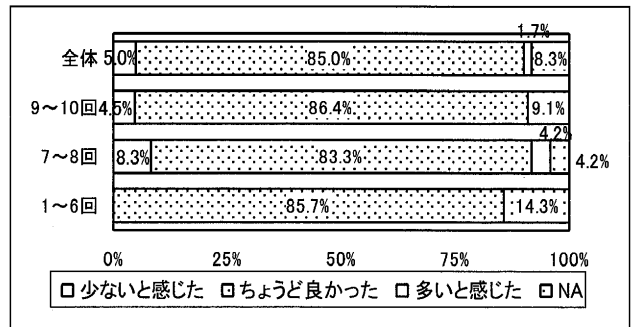


図16 配付資料について (出席回数別) n=60

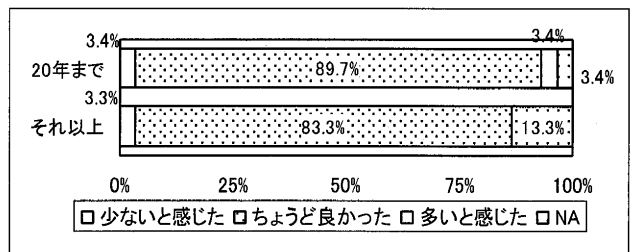


図17 配付資料について (教職歴別) n=59

「ちょうど良かった」との回答が51人と85%を占めた。出席回数別で大きな差は見られなかったが、出席回数の少ないグループには「少ない」との回答は無かった。また、教職歴別では、前項目同様に20年を越えるグループに無記入が多かった。

「少ないと感じた」との回答が、出席9回~10回のグループに1人、7回~8回のグループに2人いた。

本支援講座では毎回、講師により豊富な資料が用意された。資料の印刷、製本、セット作りなどの準備は、予想を越えて多くの時間を要するものであった。また、欠席者用に毎回の資料を取り置き、次回出席の折りに渡すなどの配慮もしており、開催側として万全の体制で取り組んだ。

それだけに「少ないと感じた」人が3人(5%)いたのは意外であったが、その内の一人は、「もっと欲しいという意味で」とわざわざ記述していた。ほかの2人も「不足感」というよりも、「もらえる資料は少しでも多い

方が良い」という気持ちの現れである可能性がある。「多いと感じた」の回答は1人のみであった。

一般的に、本学が用意した支援講座の資料が受講生に十分満足してもらえたようである。

8. 講座内容について

1) 役立つ講座内容

まず、「今後の先生の活動に特に役立つと思われた講座内容」について自由記述をしてもらったところ、53人(88%)が何らかの記述をしていた。その内容を項目別に集計してみると、表1のようになった。「全て良かった」と回答した8人については、「その他」以外の全項目に加えた。

「その他」の内容は、次のとおりであった。

- ・開校式の時のストレスの話
- ・スコット先生の出演※同様の意見ほか1人
- ・学級担任の指導法
- ・国際理解と小学校英語
- ・名合先生の子どもへの接し方
- ・柏野先生の講演

表1 今後特に役に立つと思われた講座内容（複数回答）

講座内容	人数	講座内容	人数
ゲーム	26	模擬授業の実践	15
クラスルーム・イングリッシュ	25	モデルレッスン	13
チャンツ	18	発音・音声の指導	13
絵本(扱い方を含む)	18	フォニックス	12
カリキュラム・レッスンプラン	15	年間計画	9
歌	15	その他	7

その他を除く11項目の内容を大別すると、以下のよう
に4群になると思われる。

- ① 実践的指導スキル:
ゲーム、チャンツ、歌、フォニックス、絵本の使い方
- ② 実践英語能力:
クラスルーム・イングリッシュ、発音・音声
- ③ 総合的演習:
模擬授業の実践、モデルレッスン
- ④ 授業計画:

カリキュラム、レッスンプラン、年間計画
表1をこれら4群にまとめると、表2のようになる。

表2 今後特に役に立つと思われた内容群

講座内容群	人数
① 実践的指導スキル	89
② 実践英語能力	38
③ 総合的演習	28
④ 授業計画	24

受講生にはどの群も今後役立つものと意識されているが、特に①群の実践的な指導スキルがもっとも多く意識されているようで、次のように記述されていた。

- ・授業でよく使う英語を学んだり、ゲームを考えたりする内容の講座が参考になった。とても実践的で翌週から役立った。(出席9~10回)
- ・具体的なゲーム、歌などすぐ使えるものはやはりうれしい。(出席9~10回)
- ・体験参加形式の講座が多く、日々の実践に役立つも

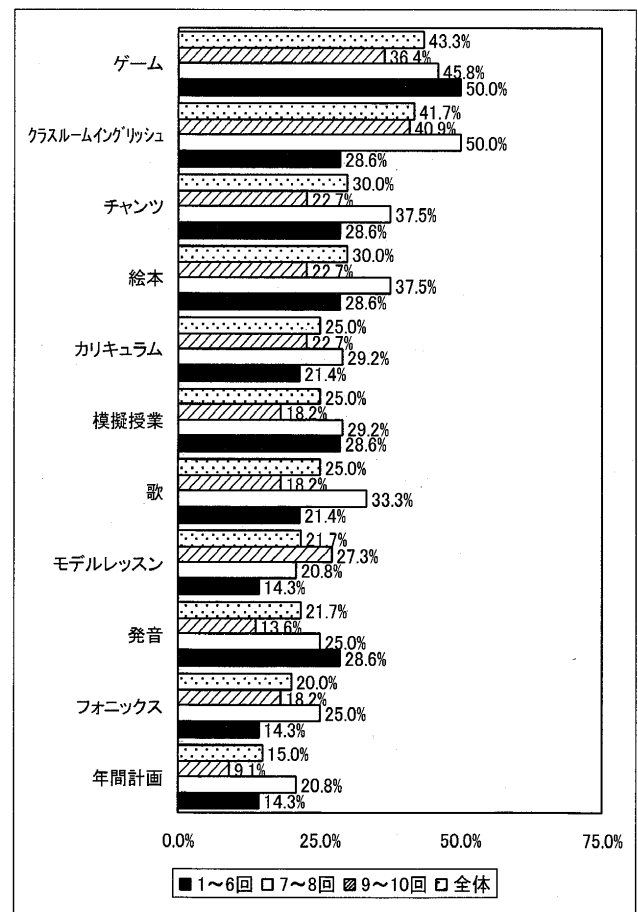


図18 特に役立つ内容（出席回数別） 複数回答

のばかりだった。(出席9~10回)

出席回数別にみると、図18のようであった。出席1回~6回のグループの記述が最も少なく、出席7回~8回のグループが最も多かった。

特に役立つと指摘された11項目の内容を、先に述べた

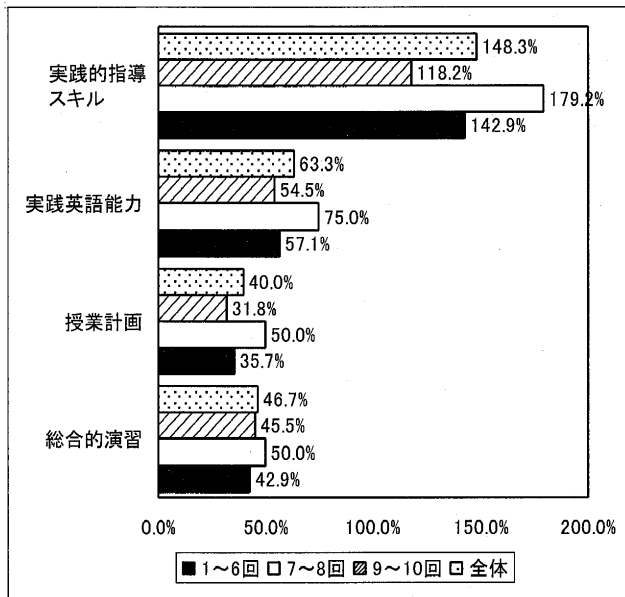


図19 特に役立つ内容 (出席回数別) 複数回答

4群にまとめて、出席回数別にしたものが、図19である。

「実践的指導スキル」に関して、出席7回~8回のグループと9回~10回のグループに大きな差が見られる。

11項目を教職歴別に比較したものが図20である。20年を越えるグループは、「カリキュラム」「模擬授業」「モデルレッスン」が多く意識され、20年以内のグループは「年間計画」と「発音・音声の指導」が突出していた。他の項目では大きな差は見られなかった。

また、図21に見られるように、教職歴別では「実践的指導スキル」に大きな差はなかった。

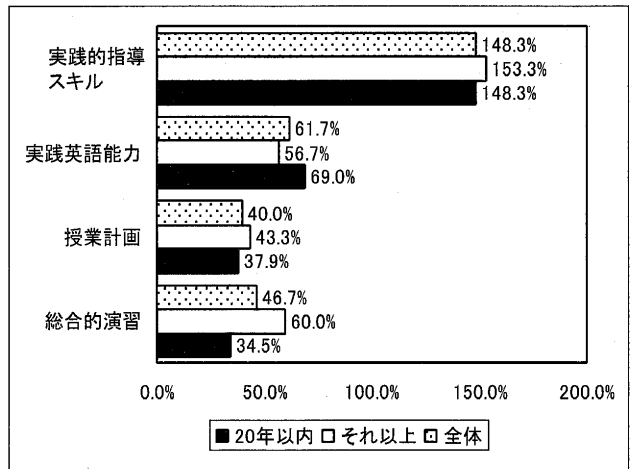


図21 特に役立つ内容 (教職歴別) 複数回答

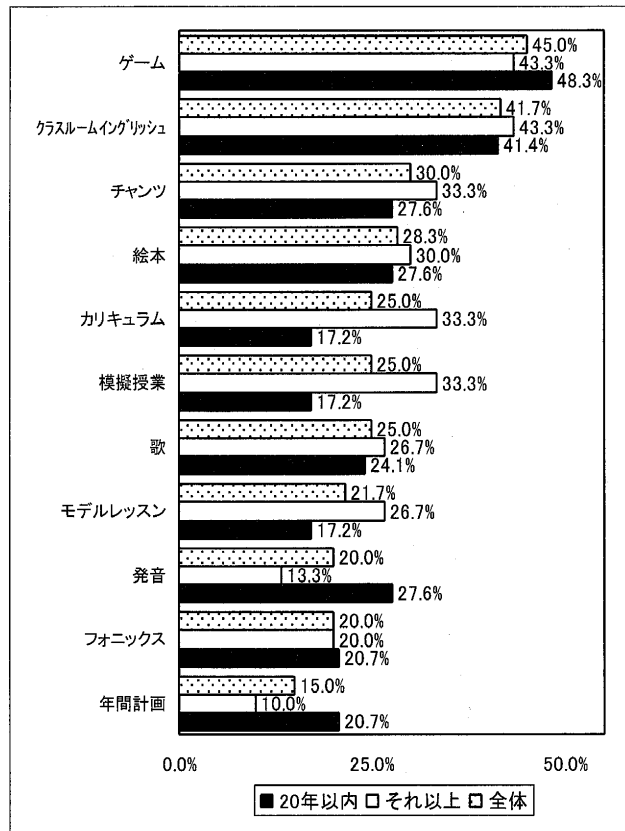


図20 特に役立つ内容 (教職歴別) 複数回答

2) もっと学びたい講座内容

次に、「もっと学びたい講座内容」について自由記述をしてもらった。37人が何らかの記述をしており、その内容を項目別に集計してみると表3のようであった。

表3 もっと学びたい講座内容 (複数回答)

講座内容	人数	講座内容	人数
クラスルーム・イングリッシュ	9	モデルレッスン	4
チャンツ	9	フォニックス	4
ゲーム	8	カリキュラム・レスンプラン	2
発音・音声の指導	8	年間計画	1
歌	7	模擬授業の実践	1
絵本(扱い方を含む)	5	その他	12

「その他」の内容は以下のとおりである。

- ・絵本を利用した展開例

- ・各学年に応じた指導法
- ・互いの学校での良かった活動
- ・担任が主として教える指導法の実践
- ・英語が分からない児童にどう指導するかの手だて
- ・レッスンプランによる1時間の流しの演習
- ・1年～6年までの系統立てた指導について、積み重ねをどう指導すれば効果的か
- ・NETとのチームティーチングの仕方、NETの活用の仕方
- ・英語での講義
- ・スコット先生の授業
- ・開校式の時のストレスの話
- ・中野先生の英語についての話

表4 もっと学びたい講座内容（複数回答）

内容群	人数
1) 実践的指導スキル	89
2) 実践英語能力	38
3) 総合的演習	28
4) 授業計画など	24

表4は、11項目を4群にまとめたものである。

11項目の内容について、出席回数別に比べたものが図22である。

出席9回～10回のグループは、「クラスルーム・イングリッシュ」「モデルレッスン」の要望が多く、逆に、出席1回～6回のグループからは、「チャンツ」「歌」の要望が多かった。既習内容によって、今後のニーズが変わってくることを示唆しているとも考えられる。

図23は、11項目を4群にまとめたものである。

実践的教育スキルや模擬授業などの実践に、出席回数グループ間の差が見られた。

教職歴別に見ると、図24のようになった。「カリキュラムの立て方」「年間計画」を除いて、20年を越える回答者の要望が大幅に多くなっている。特に「歌」は、グループ間の差が最も大きい。

図25は、11項目を4群にまとめたものである。

「実践的指導スキル」をもっと学びたいというニーズは、教職歴が長い方が強いようである。

支援講座内容についての回答で注目すべき点は、「役

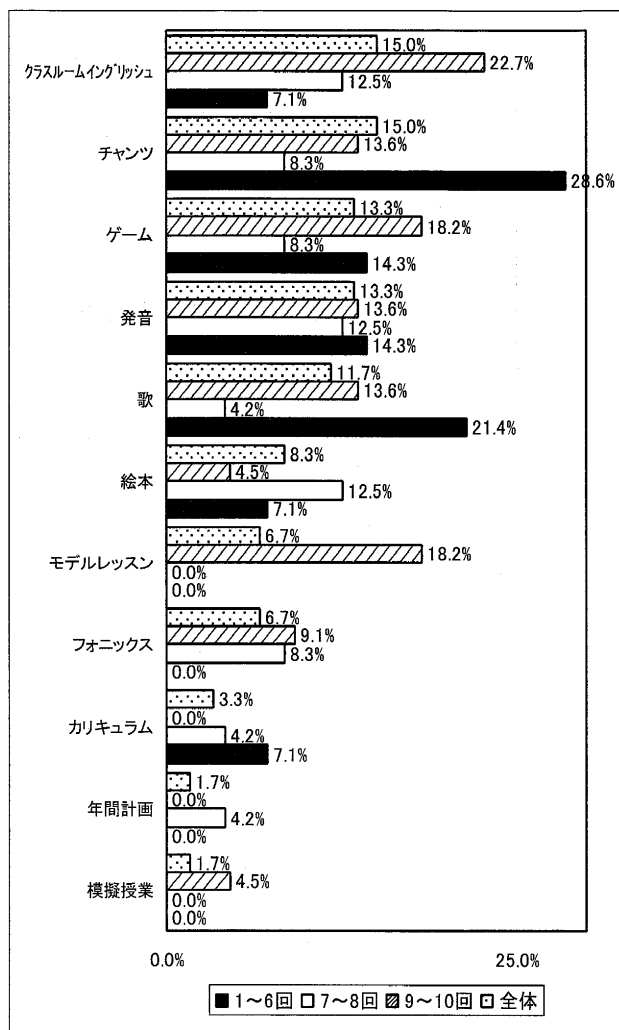


図22 もっと学びたい内容（出席回数別）複数回答

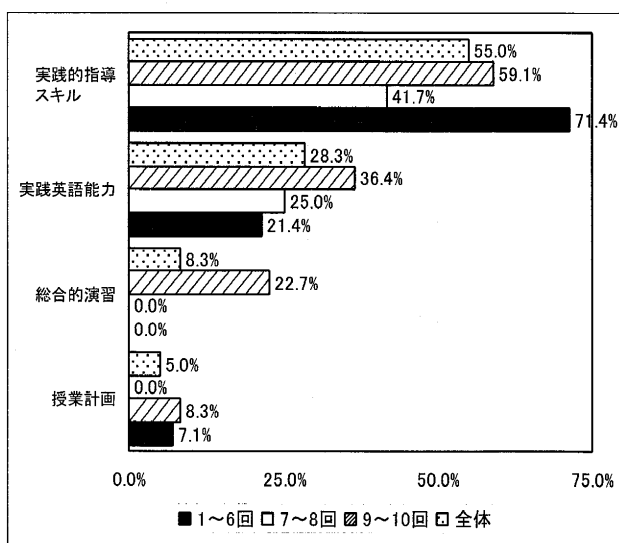


図23 もっと学びたい内容（出席回数別）複数回答

立つと思われた」と内容と「もっと学びたい」内容の両方の欄に、全てまたは一部同じ項目を書いた参加者が16人

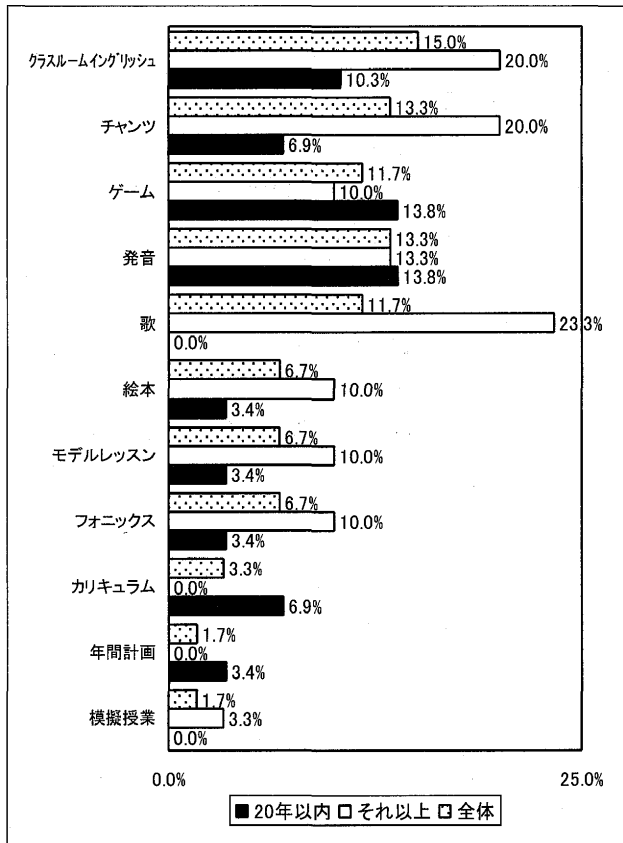


図24 もっと学びたい内容（教職歴別） 複数回答

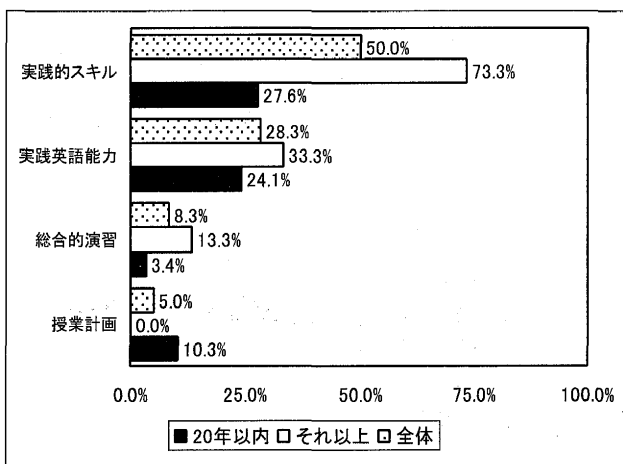


図25 もっと学びたい内容（教職歴別） 複数回答

もいたことである。「講座に出席して役に立つ事柄を学べたが、さらにもっとそれらについて学びたい」という気持ちの表れであろう。非常に前向きに児童英語教育に取り組もうとする受講生の姿勢がうかがえる。

もう一点、講座内容に関する調査結果について留意すべきことは、自由記述による調査であったということである。時間的に限られた中で、過去を含め10回分の内容について思い出しながら記述するという作業を回答者に

求めたわけで、どうしても印象の深い項目に記述が限られることになる。その観点から見れば、多くの項目を書き出してくれた回答者の協力的な姿勢に、講座への満足度の高さが伺える。

支援講座で扱った内容の項目を前もって提示し○をつけてもらう方式であれば、各項目の選択者がさらに増えたであろうことは容易に想像できる。しかし、自由記述によって、今後取り入れを検討できる新たな要望項目を引き出すことができたともいえる。

V. おわりに

以上、支援講座の回数、長さ、時間帯、時期、会場、資料、内容について、アンケートの結果を考察してきた。

「開講時期」「開講方式」「会場」の項目において今後の課題が明確になったが、全般的には、今回の支援講座が多数の受講生によって高く評価されていることが分かった。

また、出席回数別の比較によって、さまざまな項目に関する満足度や今後のニーズが変わることも理解できた。

教職歴別の比較によっては、特に20年を越える受講生の意識の高さや、児童英語教育に取り組む熱意、研修意欲の強さを確認することができた。このたび支援講座を実施し、このような熱意あふれる先生たちのサポートができたことは、本学として大変光栄なことであった。

参 考 文 献

- 1) 大津由紀雄編：「小学校での英語教育は必要か」，慶應義塾大学出版会（2004）
- 2) 松川禮子：「明日の小学校英語教育を拓く」，アプリコット（2004）
- 3) 吉田研昨：「新しい英語教育へのチャレンジャー-小学校から英語を教えるために-」，くもん出版（2003）
- 4) 特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会編：「どうなる小学校英語」，アルク（2004）